

白山 妙理権現由來の記

— 本五村三股に鎮座の神社 —

高橋 智

(替物倉員・南海郡御本五村)

佐藤鶴谷翁著「佐伯志」にはこの神社のいわれについて

「本宮社中野村三股に在り。天正七年加州白山権現より分霊を勧請したるものにして、祭神を妙理権現と称え本地十一面観音とす。祭事は八月十一日の十六日を以てす。」

又同書によると佐伯十二社のうちに入れられている白山神社は上野村白山にあると記されているが、佐伯十二社の中野村三股の白山権現が十二社のうちの二社であることは、私達が少さい時より故老によつて語り伝えられているところであり、この記事は明らかに鶴谷翁の誤りであると思われ、この点を含めて調査したのでそのあらましを記して左に。

先づ白山神社の棟札の記事を調べて見ると、次の様に書いてある。

「專祈禱当城主大神朝臣佐伯太師惟貞公御壽命長遠当世万才 当庄安全増神威武運長久受神の信授奉行之 天正五丁丑年十一月十八日鳥居建立 同世日庄内之 社家者参集于特殿而奏御神樂畢取調方事道又七郎子孫繁栄守奉給所」

上棟翌後及海部郡佐伯庄中野村三股清地天降鎮座加賀國白山妙理権現御上祭一巻分心二所靈驗三身安詳神秘

之矣

此社者中野村惣鎮主神也因而稱此神五村之産神也自然以後若殿社及破壞則五村之産子等戮力一心可修補也神則在感念而産子永祭安全息災守奉給所 当社者庄内十二社之其一而万民信敬之異他而況於産子乎干故奉造立一字 願主深矢又左工門入道藤原貞元謹言 子孫榮盛延齡息災守護奉給所祈願也矣 于時天正七己卯十一月十日水頭式部尉謹言

以上の棟札によつて及んでこの社は大神朝臣佐伯太師惟貞公の建立による佐伯の庄十二社のうちの一社である、近郷五ヶ村の惣鎮主神であると記されている。惟貞は惟定とも書き、梅牟礼城十四代の城主である。然し白山神社は惟定公によつて始めて勧請されたものでなく一階下御まられている古い棟札の裏に、宝曆年間の記事として次の様に書かれている。原文は讀みづらいので訳して書くと、

「当社は加賀の國より飛來の神であつて大同年中、夜毎に加賀の尾と云ふ處に光りもろがあらつて地鳴りが起り、諸人は眼をこまか出来なかつた。或る時この所の民歌に學にすむ札を老人があらつて、此は老人の夢枕に女神が現われ、我は是に加賀白山妙理権現なるぞとのお告げがあらつた。それで其人は加賀の尾の光り鳴り、加賀白山大神の飛來よなと恐れかしこみ、我成親子孫繁栄の吉祥として、つるの中に大きな森があつたのでそこに宮を建ててあかめまつた。その後天正年中佐伯惟貞公御立願により、此所へ現在白山社に宮地をあらため社を建立して鎮祭あらせられた。」

この書き伝えにある加賀の尾の光り鳴る云々の地加賀の尾は三股安説の薬師庵の上の山におたり、今でも加賀の鼻と云う。又三股づるの大きな森のあるところには宮を建てて祭つたと云われるところには、今でも森畑と云う地名が残つている。尚大同年間は二年で終つてゐるので

大同元年について完せば西紀八〇六年に当り逆算して千  
百六十二年昔のことになる。この時代は平安朝平城天皇  
の御宇に當り、弘法大師が唐から歸つた年になつてゐる。  
その後毛利氏の代になつても引続き崇敬せられた。そ  
れについて毛利公季継の刀入の籍書の裏に、後人が色々  
ないわれを言ひづゝいる。それによると、

元禄年中佐伯城主高慶公御奥室には、三年に亘り永  
の大森を惹い、御供悉全力を盡したるも医葉更に効  
を認めず、因つて当推現に平癒の御祈願と致せし  
御靈驗とたまわり、四年目に至りて御伏癒故遊、御  
御成記として陰曆八月十一日に城主高慶公を始め御  
奥室を伴つて御参拜あらせられた。佐伯の庄の神職残  
らず冬集し大神樂を奏し、東西南北に湯釜を建て  
四釜にて湯立神樂を奉納した。その時御室刀へ備前  
古刀二尺六寸一振と知利の御紋章入りの桐の二  
重箱に金櫃の袂紗に包み納めたる御巻物を副え奉納あ  
らせられた。云々

とあり、この御巻物には御奥室藏真俣様の御名前や年令  
なども記載してあつたという。この巻物室刀は昔庄屋宗  
因仙左五門に於て保管中、おいにく嘉永二年の大凶災に  
見舞われ烏有に帰し、室刀は刀身のみ焼け残つたので神  
殿のこの箱に納めて奉納していたと云ふ。明治末年頃河  
者かに盗まれ行方知れず、この巻物に關することは仙右  
五門が子孫に語り伝えられたもので、又更にその翌年赤念  
の爲整田の奥から概の苗木を取りよせ、御家老をして持  
参させ高慶公の代理として御手植せられたという概の木  
かこれである——とこのようなことか書かれてゐる。

想うに三殿の祭典が昔から八月十一日に取行わせら  
れて、御家中より上使が奉進せられていた、と故老の語  
り伝えはこんなことに始まるものでないかと思ふ。

高慶公奥方の平癒記念の概の木は、社のすぐ横(一向つ  
て左側)にあり、現在御神木として高く聳え、因うは四

米位あつて二人では手がとどかない。この木も元禄の終  
り年十五に植えたと算定すれば、アメリカでは南北戦争  
日本では赤穂浪士の討入りのあつた年で西紀千七百二年  
逆算して二百六十七年昔のことである。歴史とは面白い  
もの、しみじみこの木に向つて話しかけたくなる。今は  
及びこの柴田仙左五門と云う人は、現在湯釜佐伯支店長  
柴田正繁君の方の先祖である。(編者は柴田氏は本会委員)

私はこの調査に當つて神社總代から鍵を借りて神殿の  
右扉を掛け御神体を拝したところ、神像としてかあつて  
いることは、本尊は高さ四十七センチ位の十一面觀世音で  
あり、右は阿彌陀、左は藥師如来の三体であり、いづれ  
も彫刻としてはすぐれた作品と認められたが、どうも江  
戸時代初期から中期の作と思われる。

又左側の箱には天神様の木像、立像と座像各一、右  
側の箱には奇妙な形をした石灰石が三体、これが白山神  
社の御神像と伝えられてゐるが、白山にちなんで白石  
を祭つたものと思われるが、祭神は木久理比売の命であ  
り、作物の神として崇められ、又火伏の神として有名な  
のである。(註 葎理とも書く)

折を得て史談会の方々から是非一度来て調べて頂いた  
る幸甚と思つてゐる。

(附記) 本地無歸説とは佛教的を考へによると、天地一  
切万物は皆空佛の慈悲の現れと云ふことで、  
日本の神々も佛の現れとして、星大神宮は天  
日知宗、加賀白山大神は十一面觀世音の現れ、  
この伝で行くと、キリストも孔老も、いづれも  
何仏かの現れられたものとなる。

(以上)

前年度分、佐伯史談会、合冊、高麗製、奉仕中、御持参下さい。(附)  
目次を前につけて製本しますので、研究資料に便利になります。要領書、三〇四。